棚尾地区まちづくり事業
平成 24 年 10 月 25 日（木）19 時～
棚尾公民館 3 階

第１６回　棚尾の歴史を語る会　次第

進行（小笠原幸雄）

1　前回までのテーマに関する参考意見など
　中山の分村問題、若宮社、地蔵尊、敬老会など

2　テーマ 30　「大相撲清見潟」
(1) 説明（磯貝国雄）

(2) 出席者による補足説明、感想など

3　テーマ 31　「土人形」
(1) 説明（磯貝国雄）

(2) 出席者による補足説明、感想など

4　連絡事項・情報交換など

5　次回日程
　第 17 回　11 月 21 日（水曜日）　午後 7 時から
　　「貝殻合わせ」「棚尾地区内の区画整理事業」
　第 18 回　12 月 19 日（木曜日）　午後 7 時から
　　「棚尾のお医者さん」「民話：小谷がつぼ」

棚尾の歴史を語る会　テーマ 30

「大相撲清見潟」

1　要旨

大相撲力士の五代目清見潟は、天保 9 年（1838）前浜新田に生まれた。現役中は毘沙門天に因み志貴ノ海と名乗ったこともあり、前頭筆頭にまで躍進した。引退後は、勝負検査役に抜擢され、また、清見潟部屋を継ぎ、更に多くの弟子を集め部屋を大いに隆盛させた。清見潟の実弟榊原梅吉は棚尾で「福住屋」という製麺業を営み、弥生町の西山墓地には清見潟が、両親のために建立した墓がある。

2　参考文献

(1)　「碧南人物小伝」　平成 22 年発行　碧南市教育委員会　浅井久夫

(2)　「清見潟又市と碧南の相撲」平成 17 年度文化財展資料　杉浦明

(3)　「相撲」平成 18 年（2006）ベースボールマガジン社　4 月号

(4)　「鷲塚天満神社奉納板額物語」平成 16 年　東海相撲史談会　冨永行男

(5)　「碧南少年のむかしむかし探訪記」昭和 63 年発行　碧南市役所

3　五代目清見潟の足跡（以下、参考文献(1)（2)による。）

(1) 20 歳で江戸相撲に入門

相撲取りの五代目清見潟又市は、天保 9 年（1838）碧南市前浜新田に生まれた。五人兄弟の長男で、本名を榊原幸吉といい、実家は農家であった。

地元棚尾の玉伝という親方の元で土地相撲に参加し、三代目清見潟又市の目にとまった。安政 5 年（1858)、20 歳のとき三代目のもと江戸相撲に入門した。安政 7 年（1860）2 月、22 歳で「江戸」頭書・関谷川幸吉の名で序の口につき、初めて番付にのった。当時としては年齢が高いほうだった。万延 2 年（1861）2 月には序二段に昇進し、文久 2 年（1861）11 月、新の海と改めた。

翌 3 年 7 月に下の名を幸蔵に改め、同年 11 月に三段目と地道に番付を上げていった。元治元年（1864）10 月下の名を光蔵、慶応元年（1865）11 月幸吉、同 2 年 3 月幸蔵に戻し、3 年 11 月に幕下二段目に上がった。

(2) 毘沙門天のように強くなりたい。

この間、師匠の三代目は隠居して、兄弟子の三代ノ松が四代目を継承、彼もその門下となった。

新幕下の場所の 5 日目に志貴ノ海幸蔵と改名した。これは郷里の志貴毘沙門天（妙

福寺）から名付けられたもので、毘沙門天のように強くなりたいという願いが込められている。

明治 2 年（1869）3 月「東京」頭取となり、同年 11 月、幕下三枚目に昇進し、菊間藩のお抱えとなり、番付頭書も「キクマ・菊間」と変わった。

(3) 西尾出身の深柳を抑えて、五代目清見潟又市を襲名

この年の 12 月、四代目清見潟が死去した。三代目より清見潟部屋を継承してからわずか 6 年間という短期間であった。ここで、部屋の継承争いが起こったのである。当時の有資格者は、十両の深柳鉄蔵と幕下三枚目になった志貴ノ海幸蔵の 2 人であった。深柳は初名を金梃（きんてい）といい、西尾の出身であった。安政 4 年（1857）頃、三代目清見潟の弟子になり、文久 3 年（1863）幕下へ昇進した。早くから西尾藩御用達の木綿問屋深谷半左衛門の庇護を受けていた。明治 2 年（1869）4 月、幕下三枚目のとき、深谷家に因んで「深柳」と改名し、番付頭書も「西尾」となり、西尾藩お抱え力士となった。しかし、深谷家はこの当時家計が思わしくなく斜陽となっていた。

一方、志貴ノ海の故郷棚尾には、瓦屋経営の永坂杢兵衛という勢いのよい商人がいた。当店は早くから京都で優れた技術を身に付け、天明年間に初代杢兵衛は、棚尾村で、瓦製造に成功し、大浜港から各地に売り出していた。当時は四代目で隆盛を極めていた。その後援者である永坂家の資金力と人望、人柄などから、翌場所明治 3 年 11 月には志貴ノ海は、正式に清見潟を襲名した。

(4) 突き押しが得意で、立ち合いに大声を発した名物力士

明治 6 年（1873）4 月、先輩の山分（深柳が改名）の引退と交代するように、35 歳で又市は新入幕を果たした。初番付から 14 年目であった。長身で筋肉質のがっしりとした骨太の体格で、身長 6 尺 5 寸（198㎝）、体重 20 貫（75kg）と伝わるが、やや信憑性に欠ける。

変化のある突き押し（突っ張り）を武器に、ときには無双を切ったりする取り口をした。その突っ張りの強さに相手が肋骨を折り、しばらく禁じ手にされたという話も残っている。立ち合いに、相撲場の外まで聞こえるほどの大奇声を発した名物力士として知られた。

(5) 44 歳で前頭筆頭に、47 歳まで現役を続けた

その後、徐々に番付を上げていき、明治 15 年（1882）5 月、44 歳で前頭筆頭に躍進したが、これが五代目清見潟又市の最高位であった。この前頭筆頭という番付は、八代続いた清見潟の中でも、また、碧海郡出身の大相撲力士の中でも最高位にあたる。大物には勝ち目はなかったが、大関朝日嶽を倒し、大関境川と 3 回引き分けている。

幕内総成績は、65 勝 83 敗 27 分 8 預であった。成績の上では平均的な幕内力士だったが、驚異的な持久力で土俵を湧かせた。そして 47 歳になった明治 18 年（1885）5 月限りで引退した。幕内在位は 3 年間、29 場所の長きにわたった。

(6) 帰郷すると、子ども達に思いっきりぶつからせた

引退後は年寄り専務となった。明治 22 年（1889）相撲会所の名称が東京大角力協会と改称され、規則も整理され役員制度も厳格になった。その結果、清見潟は勝負検査役に抜擢された。その後勧進元（当時は願人）になったり、明治 30 年（1897）の役員改選時においても再選されたりしている。

郷里の生家は、清見潟の実弟榊原梅吉が継ぎ、棚尾で「福住屋」という製麺業を経営していた。巡業の合間に清見潟が帰宅すると、玄関を上がったところで蹲踞の姿勢をとり、子ども達に思いっきりぶつからせたと伝わっている。

(7) 多くの三河出身力士を育てた

清見潟の本墓は、東京六本木の教善寺墓地に、四代目清見潟に続いてある。また、棚尾の西山共同墓地には、明治 11 年（1878）に清見潟が建立した両親の墓がある。

尚、清見潟部屋は元来三河出身が多いが、五代目は更に多くの弟子を集め隆盛した。彼は先代の養子になり榊原姓から井上姓に替わっている。地方門人の出身地は、西三河一面に及んでいる。五代目清見潟又市は部屋を過去最大に隆盛させただけでなく、三河近辺の土地相撲の組織を大きく育成したのである。明治 33 年（1900）6 月 17 日没。

(8) 弟子による顕彰碑建立

大正 3 年（1914）5 月になって、この三河近辺の土地相撲の門弟等により、碧海郡今村（安城市）里町中野池の旧東海道沿いに、仙台石による大きな顕彰碑が建立された。正面には大きく「三州前濱産　清見潟又市碑　清見潟又蔵建之」とある。裏には地方門人 78 名と東京弟子 12 名の名が刻まれている。井上む免は清見潟の妻女である。門人ではないが、清見潟の実弟榊原梅吉の名も見える。

4　歴代清見潟一覧表

(1) 初代清見潟又蔵

西尾市和気町の出身。寛政 7 年（1795）没、同町來空寺に、没年頃門弟が建てたお墓が残っている。

(2) 二代目清見潟又蔵

埼玉県栗橋出身。文政 9 年（1826）没。

(3) 三代目清見潟又市

東京都立川市出身。文久 4 年（1864）没。

(4) 四代目清見潟又市

名古屋出身。明治 2 年（1869）没。

(5) 五代目清見潟又市

碧南市出身。明治 33 年（1900）没。

(6) 六代目清見潟又蔵

三重県出身。大正 9 年（1920）没。

(7) 七代目清見潟又蔵

宇都宮市出身。昭和 9 年（1934）没。

(8) 八代目清見潟又蔵

三重県出身。昭和 42 年（1967）没

5　相撲関連事項

(1) 鷲塚騒動と清見潟

明治 4 年（1871）真宗大谷派護法会の若手僧侶等による鷲塚騒動が起き、首謀者として、石川台嶺と榊原喜代七が処刑された。この喜代七は清見潟門弟の土地相撲力士で、四股名を城ヶ崎と称していた。

(2) 相撲番付表

清見潟のものではないが、永坂杢兵衛家には江戸時代末期から明治時代にかけて 5 枚の相撲番付表が残っており、市史資料（目録五№947）として市へ寄贈されている。

(3) 奉納相撲の隆盛

以前は、神社やお寺の奉納相撲が盛んに行われていた。

棚尾小学校開校式の余興でも相撲が行われている。

棚尾の歴史を語る会　テーマ 31

「土人形（つちにんぎょう）」

1　要旨

碧海台地のこの地方は、土に瓦、コンロ、土人形等の原料となる粘土が含まれ、これらの生産が盛んであった。土人形はこの地方では「オボコ」とも呼ばれ、県内だけでなく岐阜、長野、静岡にまで販路を延ばしていた。棚尾はこの中でも、土人形作りが最も早く江戸時代後期から始まり、作者も多数輩出した。しかし、素朴な土人形は、時代と共に華麗な衣装ヒナに変わり、棚尾での製造は昭和二十年代には廃絶した。

2　参考文献

(1) 碧南市文化財　第二集　おさえ瓦・土人形

(2) 「三河土人形」　安城市歴史博物館企画展　平成 11 年 10 月

(3) 「三河土人形」　古谷哲之輔著　発行：日本雪だるまの会　昭和 48 年 12 月 15 日

(4) 「鈴木良典コレクション」豊橋市美術博物館

3　三河土人形の起源と誕生

（以下、主に、参考文献(2)による。）

三河における土人形の起源についてさかのぼれるものは、江戸時代後期に田原藩において製作を奨励したものがある。しかし、田原の土人形がどのような人形であったのか、現存する資料が皆無であるため、現時点では不明である。

碧南地域での土人形制作は、伏見人形との共通性が高いことから、伏見人形や、伏見人形の影響を受けた乙川土人形を起源として、時期は江戸時代後期か幕末頃と考える。しかし、これらはあくまで伏見土人形や乙川土人形の模倣であり、これが三河土人形として、確立するのは明治になってからである。

4　三河土人形発展の背景

碧南地域を中心として、歌舞伎ものを始めとした三河土人形が盛んに生産された背景には、何点かの理由が考えられる。

(1) 村歌舞伎・村芝居の隆盛

江戸時代後期の頃、三河、尾張、美濃地方では村歌舞伎など地芝居が非常に盛んであった。この芝居熱は各地を巡業する芝居興行にとどまらず、村々における村芝居や神社などの祭礼芝居にも及んだ。

この歌舞伎から題材を取った土人形の誕生により、それまでの乙川・伏見系の土人形から脱却し、新たな三河土人形が確立した。人々は歌舞伎の名場面を、人形という形で手に入れることが出来るようになったのである。また、三河土人形は、特に顔の描き方が緻密なことも注目すべき点である。顔の造りや隈取の方法は、歌舞伎の場面ごとの研究をしなければできないことである。つまり、歌舞伎に多く接するという文化的な環境が、この緻密な顔を支えていたと考えられる。

(2) 三河瓦の鬼板師

動きのある歌舞伎に対し、人形作りには、動かない人形を動いているように見せる高度な造形力が必要になる。この躍動感溢れる三河土人形の造形を支えたのが、鬼板師の技であった。鬼板師は原型（雄型）の製作を担当した。碧南・高浜地域は瓦の一大生産地であり、瓦職人や鬼板師が多く暮らしていた。こうした鬼板師は緻密で迫力ある粘土細工の技術から、「ヘラの魔術師」とも呼ばれていた。

(3) 豊富な粘土の産地

愛知県の中南部、矢作川と衣が浦湾に挟まれた地域には、褐色の土壌で知られる碧海台地が広がっている。この碧海台地の南部は豊富な海性粘土層を持ち、三州瓦の産地として発展した。土人形の製作者は、初めは自分の所有する畑の下を掘って粘土を採集していたという。主原料がどこでも、誰でも容易に入手できるということが、三河土人形の発展を物理的に支えていた。

(4) 農閑期の副業としての適正

忘れてならないことは、土人形の製作が農家の副業として、農閑期に行われていたことである。人形が買われるのは、旧暦の 3 月 3 日のひな祭り、現在の暦では 3 月下旬から 4 月上旬にあたる。つまり、この頃までに製作し出荷をすませてしまえば、それ以降は其の年の稲作の準備に取りかかれるのである。

また、製作の開始も、農繁期の合間にシラジを作っておけば、11 月か 12 月に窯焼きができた。土人形の製作サイクルは、稲作の製作サイクルの全く逆であり、絶妙な組み合わせだったのである。

5　製作者と製作地の広がり

土人形制作者が急に増え出したのが明治20年代である。おそらくこの頃は村歌舞伎、村芝居の熱気が一段と高まってきたことと一致する。その最盛期と考えられるのは、明治 40 年頃から昭和 5 年頃までである。

製作地の分布としては、現在の碧南市域になる棚尾、旭、大浜、新川に約３分の２が集中する。粘土採集の容易さと、鬼板師が近くに居住したことによると考えられる。

現在最も詳しい資料と言われる「参考文献(3)」によると、明らかになっている製作者は次の 32 家 43 人にのぼる。

番 号	製作地	作　　者
1	棚尾	亀島　久八
2	棚尾	鈴木市太郎（父）　鈴木初太郎（子）
3	棚尾	岡本重太郎（父）　岡本開太郎（子）
4	棚尾	斎藤宇三郎
5	棚尾	杉浦　吾市
6	棚尾	小笠原愛三郎
7	棚尾	杉浦松太郎
8	棚尾	石川秋太郎
9	棚尾	永坂常次郎
10	棚尾	芝田甚太郎
11	棚尾	永坂初太郎
12	棚尾	小沢銀次郎
13	棚尾	小笠原秀雄
14	旭	高山市太郎（父）　高山良一（兄）　高山八郎（弟）
15	旭	高橋徳太郎（父）　高橋行雄（兄）　高橋孝一（弟）
16	旭	杉浦惣三郎
17	旭	岩間房太郎
18	旭	杉浦亀太郎（父）　杉浦　一長（子）
19	大浜	美濃部四市（弟）　美濃部　泰（兄）
20	大浜	禰宜田佐太郎（父）　禰宜田　章（子）
21	大浜	榊原　庄松
22	新川	亀島初太郎
23	西尾	鈴木三四郎
24	西尾	石川　譲松（父）　石川喜四郎（子）
25	矢作	平屋
26	矢作	都築弥太郎
27	鴨田	山本　しづ
28	豊橋	杉浦幸次郎
29	豊橋	吉田　孫吉（義父）　吉田作平（婿養子）
30	豊橋	西村　茂治
31	豊橋	小沢辰次郎
32	国府	藤井　末吉

6　棚尾の土人形制作者

上記のように棚尾は、土人形の歴史が最も古く、作者も 13 家 15 人と多数輩出した。以下、参考文献(3)により作者別にその足跡を辿る。

(1) 亀島久八

嘉永 3 年～大正 10 年

棚尾村字中久根、石川久右エ門の二男として生まれ、若年から田舎芝居の役者として各地を興行して歩いた。田舎回りの芝居は、年間興行しているわけでなく、ふだんは農業に従事している者も、秋祭りの頃から春までの農閑期に、随時召集されて地方興行に参加したものである。

愛知県は昔から歌舞伎熱が盛んで、今でもどんな山村僻地に行っても、明治生まれの老人などに熱心なファンの多いのには驚く。また、雛祭りも「三月前になれば、女子は親にすがりて、雛を求めてくれよとせがむ也。この人形を求めてあたえぬれば、風呂敷などを箱にいちかけ、かざりて悦ぶこと限りなし」（大橋永常＝広益国産考）とあるように、昨今のように華美ではないにしても、いじらしいほどの愛着を持って広く行われた。

久八はそうした環境の中に育ち、各地を回って歩いたので、庶民の欲求を肌に感じたものであろう。芝居の知識を基に、歌舞伎の外題を取り入れた焼き雛を作り始めた。正に時好に投じたもので、一躍脚光を浴びた。三河土人形の元祖と言われるゆえんである。これは明治と改元されて間もない頃であった。

久八は、明治 8 年、隣村大浜村亀島弥平の四女、はつの婿養子になった。いつ頃まで作ったかは定かではないが、作品の背面上部に雛久、あるいはヒナ久と彫ったものがある。

(2) 鈴木市太郎、初太郎

明治元年～昭和 15 年、明治 23 年～昭和 36 年

市太郎は通称市助といって、宇田ノ崎、鈴木嘉平の長男として生まれた。後、堀切に移る。父の嘉平も非常に器用な人で、棚尾祭りの山車人形や神社の神馬なども作った。八柱神社には嘉平の作った白馬が現存している。

亀島久八に次いで、斎藤梅太郎と共に棚尾人形の功労者と言われている。市太郎から、その子三代目初太郎に継がれ、三河の内、最も多くの作品が残されている。原（もと）型から起こしただけに彫りも深く堅実で、彩色は渋く落ち着いていて重厚な作である。動きの多い馬乗武者などに棚尾独特のよさが見られる。女物を得意とし、60cm の行灯持ち花魁は不朽の名作として、今でも名古屋土人形の中に生きている。男女に限らず、目頭、目尻を離し、切れ長でやや吊り上り気味のものが多い。初太郎は大正 5 年妻帯と共に、土人形専業になった。銘はヒナ市、ヒナ初、鈴市等

があり、ほとんどものに鈴市の刻印がある。初太郎は戦後まで作っていたが、死後棚尾人形も廃絶した。初太郎の二男健次氏は三鈴鉄工場を経営している。

※　棚尾小学校百年誌

「棚尾土人形は、江戸時代末期初代鈴木嘉平の創始とされている。型を用いて土人形を作り出したのは二代目市太郎からで、創始の時期は明治 15～18 年頃であろう。」

(3) 岡本重太郎　開太郎

弘化 2 年～昭和 2 年　明治 8 年～昭和 24 年

中山は農家の副業としてほとんどの家が黒焼きのかまどを作っていたが、岡本家だけがオボコ屋であった。重太郎の作は繊細華麗、見事であるがその数は極めて少ない。長男の開太郎は書画に優れ、後には重太郎の焼いた人形に全て絵付けをした。開太郎は芝居絵を参考にして、原型は全部自作した。人形は父の重太郎に似て描彩緻密であるが、顔の表情は精悍で、迫力ある作である。数ある三河人形のうちでも最も異色があり、節句人形と呼ぶのにふさわしい優れた作品である。

銘は中十とあり、まれに中重としたものもある。三河全域はもちろん美濃方面まで、中十の製品から型取りしたものが発見されている。棚尾・旭の抜き型の中に、中十の銘のものが最も多く残っていた。

(4) 斎藤宇三郎

明治 9 年～昭和 24 年

棚尾村斎藤徳右ヱ門の三男に生まれ、明治 30 年同村加須に分家した。オボコは明治 20 年頃から始め、棚尾では草分け的な作者で、弟子も杉浦吾市、小笠原愛三郎、小笠原銀二郎の三人がある。映画館（旧芝居）三栄座の座主でもあった。大正 10 年頃まで作ったが、作品については不明である。

(5) 杉浦吾市

明治 16 年～昭和 19 年

棚尾村幸十の長男に生まれ、瓦師であったが、日露戦争に従軍、凱旋の後、23 歳で斎藤宇三郎に弟子入りした。この頃は土人形が最も盛んな時で、作れば作るだけいくらでも売れた時期であった。土は現在の市役所の近くに土場があり、そこから採取していた。製作した期間は 17 年間で、大正 10 年頃には、オボコの売れが遠くなったので思い切りよく廃業し、ふとん屋に転業した。棚尾ではこの頃に廃業した作者が比較的多いが、新型の衣装ヒナの台頭で、土人形に衰退のきざしが見え始めた頃である。

(6) 小笠原愛三郎

明治 27 年～昭和 3 年

棚尾村小笠原皆太郎の長男に生まれ、斎藤宇三郎に師事し、明治末から約 20 年間製作していたが、病死した。

(7) 杉浦松太郎

明治 26 年～昭和 10 年

棚尾村田ノ崎、杉浦忠七の長男に生まれた。松太郎は 15 歳頃から杉浦吾市に師事し、土人形を作ったが、この頃は盛んに売れた時なので、一家をあげて製作の手伝いをした。27 年間製作したが、若くして病死した。作品は少々荒くザラザラした感じで、棚尾一般に比べて黄色味が強い。彩色は淡彩で、顔は男女ともに優しく、特に目に特徴がある。眉は筆勢よく長く、目は上下まぶたを中太に描いて合わせてあるので、黒目が大きい。目頭、目尻はつけることなく切れ長である。銘には、棚森ヒナ松、タナヲモリヒナ松、タナヲヒナ松、ヒナ松等と彫ったものがある。

(8) 石川秋太郎

明治 13 年～昭和 20 年

棚尾村の農家甚助の長男に生まれた。杉浦吾市の教えを受けたが、吾市より年長で、家も向いにあり、窯も型も吾市のものを使用していたから、師弟というより友達であり、共同制作といった方が適切である。従って大正 10 年吾市の廃業と同時にやめてしまった。製作期間も約 10 年で短い。その後は農業に専念した。

(9) 永坂常次郎

明治 6 年～昭和 16 年

棚尾村永坂徳蔵の長男に生まれた。明治中期から大正初期までの約30年間製作し、棚尾の中でも長老的な作者である。

(10) 芝田甚太郎

明治 24 年～

棚尾村の農業芝田亀太郎の二男に生まれ、15 歳のころから永坂常次郎に師事、昭和初年までの約 25 年間製作した。

(11) 永坂初太郎

明治 7 年～昭和 19 年

棚尾村永坂長造の長男に生まれた。斎藤梅太郎の従兄弟であり、家は隣に住んでいた。初太郎はもっぱら梅太郎の型によって作っていたが、これは梅太郎が型を初太郎に作らせたのかもしれない。

(12) 小沢銀二郎

明治 40 年～昭和 20 年

字畑中に生まれた。13 歳頃斎藤宇三郎に入門していたことがあるが、後には旭村平七の高山市太郎の弟子になった。従って、乙川―豊橋の流れをくむ旭土人形の作

風を継いでいる。特に眉の描写と明るい朱と緑は旭の特徴をよく表している。しかし、高山八郎氏によると、其の中に棚尾特有の図柄を用いたもののあるのは、斎藤宇三郎の影響であろう。土は近くの瓦屋のものを買い、二種類ほどを混合して使い、この当時すでに自分で採土することはなかった。

(13) 小笠原秀雄

大正 2 年～昭和 12 年

畑中の小笠原文治郎の二男に生まれ、母の姉妹の夫である旭の高山市太郎に師事した。製作期間は短く 10 年余である。作品は銀二郎と同じく、旭の作風をよく伝承している。タナヲオボ秀の銘もあり、オボ秀と呼ばれていたものとみえる。

(14) 斎藤梅太郎

慶応元年～昭和 7 年

通称は梅三郎といい、棚尾村利七の長男に生まれた。梅太郎は元来土人形作者ではなく鬼板師である。屋根小や永坂杢兵衛の仕事をしていたこともある。大正 14 年新川町千福加藤休松の抱え鬼板師になって、加藤家の職人長屋に住んだ。梅太郎はオボコ屋の依頼で原型は作ったがオボコは作っていない。

(15) 高山八郎

大正 11 年～平成 24 年

棚尾ではないが、工房は志貴崎町 2 丁目にあり、関係が深い作者である。平成 24 年 7 月ご逝去された。

工房の玄関に、次のような碧南市指定無形文化財の指定表示板が掲示されている。

土人形（オボコ）作り

指定区分　市指定無形文化財

指定年月日　平成 14 年 4 月 1 日

形状　　高山八郎

所在地　　碧南市平七町 2 丁目 130 番地

童子の意である「オボコ」を、かつてこの地方では、親しみをこめて土人形全般を指して使っていた。高山八郎は、旭土人形の創始者である父市太郎と兄良一を師とし昭和 15 年より 32 年頃までオボコを作ったが、衣装びなに圧迫され廃業。平成 3 年、土人形が忘れられず、新たに志貴崎町に工房を開設。オボコ作りを再開した。

今では三河で唯一土人形を造り続け、技術の保存・継承をしている人形師である。作品は、彩色に明るい緑と朱に近い赤を用い、瞳が優しいのが特徴である。

碧南市教育委員会

(16) 昔の記録

ア　棚尾村文書（№379）明治 30 年「県税工業者台帳」の中に、土人形があるので掲載する。尚、売上額の内、円未満の金額は省略する。

住　所	氏　名	売上高	
33 番戸	亀島　久八	49 円	
1018 番戸	岡本重太郎	40 円	
621 番戸	小澤　新十	25 円	
304 番戸	榊原治郎吉	24 円	
89 番戸	斎藤梅太郎	15 円	明治 30 年廃業
653 番戸	鈴木市太郎	9 円	
247 番戸	生田　助七	9 円	
615 番戸	三嶋粂四郎	7 円	
595 番戸	杉浦　清松	5 円	
100 番戸	榊原　源助	4 円	
105 番戸	永坂初太郎	97 円	
68 番戸	斎藤宇三郎	20 円	

イ　同文書（№462）昭和 4 年度　営業税課税標準額調の内「雛人形」に掲載されているのは次のとおりである。

字加須	永坂初太郎	100 円
字田ノ崎	杉浦松太郎	100 円
653 番戸	鈴木初太郎	250 円
〃	鈴木市太郎	550 円
字畑中	小笠原皆太郎	100 円

7　土人形の構造

土人形の構造は、型抜きをして製作することもあり、内部が中空になっている。また、その型が多くの場合前後二つに別れているため、横から上にかけての部分に、前と後の型抜きしたものを合わせた接合痕が残る。大きな土人形の場合は、必ずしも前後二つの型ではなく、四つや六つの部分に分かれる場合もある。但し、彩色が施されるのは、大半が前面のみである。

底部は、ほとんどふさがったもの、端部から 1～2cm 内側まであるもの、全くないも

のに分けられる。三河土人形の場合は端部から 1～2cm 内側まであるものが多いが、ほとんどふさがったものもある。ほとんどふさがったものでも、焼成時に内部の空気が抜けるように、小さな穴が開いている。

8　製作工程

(1) 原型作り

製作しようとする題材を粘土で成形して、いわゆる雄型になる原型（モトガタ、タネ親）を作る。この原型は、2 日～1 週間天日干しにした後に、焼成して焼き固めてもよいが、必ずしも焼き固めなくともよい。但し、焼き固めたほうが長期間使用できる。

粘土で作ったものは、成形して乾燥後に焼成すると、約 15%の収縮が生じる。つまり、原型の焼成で 15%、型の焼成で 15%、型抜きした土人形の焼成でさらに 15%が収縮するため、出来上がった土人形は実際には、成形直後の約 60%の大きさとなる。このため、出来上がりの大きさをはじめから想定するなら、その原型は 60%以上大きく作らなければならない。

(2) 型作り

原型に粘土を押し付けて、雌型にあたる型を作る。（カタオコシ、型お越し）。この時、原型全体に粘土を押し付けておいたものを、小刀で前後二つに割って原型から分離させる方法と、原型上の型に合わせ面の位置に墨付けしておき、前型と後型を別々に作る方法とがある。

型は、陰干しの後、天日で乾燥させ、必ず焼成する。三河土人形の場合、躍動感あふれる形のために凹凸が激しく、型も十分な補強をしておかなければならない。使用し傷んできた型は、セメントで補強することもあるという。

(3) 粘土の採集と練り

現在は瓦屋から入手しているが、以前は自分の家の畑を掘って採集していた。興味深いのは、粘土に様々なものが含まれていた方が、焼く時に割れないからいいと言う人もいる。

また、砂などの混和材を混ぜると、収縮率が抑えられて割れにくくなるが、粘り気がなくなり成形が困難になる。

(4) 型抜き

棒で平たくのばした粘土を、型にはめ込み、しばらく乾燥させた後に型から離す。この離型を容易にするために、あらかじめ雲母（キララ）、練炭の灰、でんぷん粉などを内部に播くこともある。

3～4 時間乾燥させた後に離型する。土人形の型は、前型と後型に別れているので、

この両者を、粘土で接合する。型から抜かれたものを「シラジ」と呼ぶ。

(5) 乾燥

シラジの乾燥は、室内に置く形で乾燥させる。これは型抜きを農繁期の仕事の合間に行い、少しずつ作り貯めておくためでもある。窯焼きまでに時間のない場合は天日干しにする。

(6) 窯焼き

個人で異なるが、凡そは次のようであった。窯の外形は2間×1間半で、片方の短辺側の下部に炊き込み口と空気穴があり、その対辺に煙突と中にシラジを詰め込む作業用の隙間がある。窯自体は、瓦と粘土で作り、内部は煉瓦を用いる。また、作業用の隙間は、窯焼き時には煉瓦と粘土で塞いでおく。

内部の構造は、大きく三つに分かれ、下から空気が通る部分、薪が燃えて火が回る部分、シラジを詰め込んで焼成が行われる部分である。空気の通る部分と火が回る部分との間は、「テキ」と呼ばれる鋳物で区切られる。

シラジの詰め込み方に特にルールはない。大きなものの隙間に小さなものを詰め込むなど、できるだけ多くのシラジを詰め込む。その後、作業用の隙間を煉瓦で塞ぐ。

窯焼きは早朝からシラジを詰め込むが、直ぐ点火する人や午後になってから点火する人などまちまちである。但し、窯から取り出すのは、いずれも基本的に翌日である。

火の調節は、始めの2時間程度は徐々に温度を上げていき、次の1時間半ほどは全火力で焚き、その後は、徐々に冷ましていく。これは、焼成時に急激な温度変化が生じると、粘土の収縮が均一には進まず、ヒビや割れの原因になるためである。このように窯焼きが終わった素焼きのものを「キジ」とよんでいる。

(7) 彩色

手順としては、胡粉にフノリを混ぜたものを、刷毛でキジの全面に塗る。次に膠を混ぜた面胡粉を顔の部分に下塗りし、さらに仕上げ塗りをする。顔の下地が整ってから、顔を描いたり、体の彩色を行うことになる。顔を描くことは人形制作者自身が直接担当していたが、他の彩色は家族が手伝い、一家総出の作業であった。

9　流通

(1) 土人形の流通には、次の四つがあった。

ア　仲買人による買い付け

イ　個人商店からの注文

ウ　行商人による行商（振り売り）

エ　直接注文

(2) 運搬方法

ア　出荷に際しては、竹で編んだ籠に入れて、注文も籠の数でなされていた。

イ　行商人の場合、近くは自転車で回った。

ウ　鈴木健次氏からは、貨車で足助地方へ出荷し、集金に行ったということにお聞きした。

１０　土人形が見学できる場所

個人が所有する作品を除き、県内で見学できるものは次のとおりである。

(1) 奥三河郷土館（常設）

設楽町田口字アラコ 14　電話 0536-62-1440

約 800 体の土人形がガラスケース内に、名前も記載され、整然と展示されている。

(2) 八柱神社社務所（但し、開いている時のみ）

底面に「ヒナ市」の銘のある鈴木市太郎の「鍾馗像」（高 29cm　幅 16cm　奥行 12cm）が一体奉納されている。

(3) 碧南市役所内

交通安全協会に「招き猫」

(4) 平七霞浦神社（但し、開いている時のみ）

本殿に「右大臣、左大臣」

(5) 足助の雛まつり（但し、雛まつりの季節のみ）